

# 第33期第2回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！

平成29年12月8日（金）京都まなびの街生き方探究館で、第33期京都市社会教育委員会議の第2回目となる会議が開かれました。「キャリア教育を通じた地域協働の推進について」を中心とした会議の模様をわたくしマナビィがレポートします！

## ■ 出席委員（17名のうち12名）※五十音順

稲垣 恭子 委員，大八木 淳史 委員，齊藤 修 委員，佐伯 久子 委員，  
園部 晋吾 委員，千賀 修 委員，瀧野 早苗 委員，平尾 和正 委員，  
本郷 真紹 委員，柗木 良子 委員，森 清顕 委員，吉川 左紀子 委員



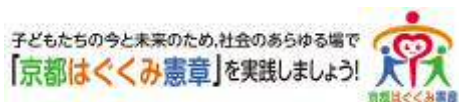
## ■ 第33期委員の自己紹介

### ○ 稲垣 恭子 委員（京都大学大学院教育学研究科長）

京都大学の教育学研究科で教育社会学講座を持っております，稲垣と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

### ○ 千賀 修 委員（平成28年度京都市PTA連絡協議会会長）

私は，前年度の京都市PTA連絡協議会会長を務めておりました千賀と申します。本年度は京都はぐくみネットワークの幹事長などを務めさせていただいており，この社会教育委員に就任させていただきました。まだまだ勉強の足りていない部分ありますけれども，皆様のご意見をしっかり聞きながら，また私自身も周りの保護者に少しでも伝えていけるようにしたいと思います。



京都市では，子どもたちの笑顔のため，大人の行動規範として[京都はぐくみ憲章](#)を定めているよ！



## ■ 議事 - 1 キャリア教育を通じた地域協働の推進について

### ○ 事務局（永田 京都まなびの街生き方探究館事務局長）

＜京都まなびの街生き方探究館とは＞

- 当時，「学校での学びと家庭生活があまりにも乖離」していることが教育の課題として挙げられておりました。このことは国の学力調査や OECD の調査でも明らかですが，子どもたちが学校で何のために勉強するのかが分かっていない状況がありました。当時のそういった状況を解消するため，「社会体験をしながら，社会のしくみを学び，子どもたち自身の将来の生き方について考えるための施設」を開設し，子どもたちに本当の意味での生きる力を育くもう」と産学公連携の下，平成19年1月に開設したのが京都まなびの街生き方探究館です。
- 生き方探究館では，京都モノづくりの殿堂事業（主に小学4年生が対象），スチューデントシティ事業（主に小学校5年生が対象），ファイナンスパーク事業（主に中学校1年生が対象），生き方探究・チャレンジ体験推進事業（主に中学校2年生が対象。各中学校で実施される職場体験事業）の4つの体験学習を実施し，合わせて年間約37，000人の子どもたちが学習に取り組んでいます。

京都まなびの生き方探究館には、いろんな体験事業があるよ！  
[こちらのパンフレット](#)に詳しく載っているので、ぜひご覧ください！



#### 京都モノづくりの殿堂事業

児童（主に小学4年生）が、京都に素晴らしいモノづくり企業があることを知り、「モノづくり」に高い関心を持つと共に、「ものづくり」企業の企業創業者の生き方やモノづくりに携わる人々の情熱に触れることを通して、自分自身の将来や夢について考えを深め、その実現に向けて意欲を高めるための事業。



#### スチューデントシティ事業

生き方探究館の3階に銀行、商店、新聞社、区役所等からなる実際の「街」を再現し、児童（主に小学5年生）はそこで勤める社員や職員と消費者の両方の立場を経験。事前・事後学習で学ぶことと合わせて施設での体験学習を行うことにより、社会と自分の関わり、経済の仕組み、お金とは何か、働くとはどういうことか等について学ぶ事業。



#### ファイナンスパーク事業

生き方探究館の2階に再現した実際の「街」で、生徒（主に中学1年生）が税金・社会保険料をはじめ、食費や水道光熱水費、住宅費など生活に必要な費用を試算し、様々な商品やサービスの購入・契約などを体験。社会に溢れる情報を適切に活用する力や自らの生き方につながる生活設計能力等を育成する事業。



#### 「生き方探究・チャレンジ体験」推進事業

中学生（主に中学2年生）が、3,700もの事業所の協力の下、自らの興味・関心に応じた職場体験や勤労体験を3～5日間の日程で実施。実際の職場での体験を行うことで、「働くことの厳しさと喜び」を実感し、自らを見つめ、生き方について考えを深めながら、社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる事業。



・これらは子どもたちが実社会に出て体験することを、小中学生のうちに疑似体験させようという取組です。「疑似的ではあっても出来るだけ本物の体験を」ということで、当館内に設置した店舗や商品は全て実在の企業にご協力いただいた本物になっています。また、体験する内容も実社会に沿ったプログラムとなっています。

・事業開始当初は、教員や保護者の方から当館での取組の時間を「学校での教科学習に充てる方がいいのでは」といった、事業の必要性を疑問視するお声もありました。現在は、事業に対する理解が深まり、98%の先生方がここでの学習が大切であると賛意を示しています。当初は、教員の賛同は50%程度しか得られておりませんでした。

・この10年間で一定の成果は得られ定着もしてきましたが、これを更に学校・家庭・地域にご協力いただき充実させていきたいと考えておりますので、ご理解・ご協力をいただければと思います。

## ○事務局（稲葉 生涯学習部統括首席社会教育主事）

### ＜学校教育におけるキャリア教育＞

- 京都市では、生き方探究（キャリア）教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことができるようにする教育であると定義づけを行っています。
- 具体的には、学校教育全般を通じて「人とともに社会を生きる力」「自分を知り律する力」「課題を見つつけ解決する力」「夢や希望をつくりあげる力」という4つの能力を育てていくこととしています。これには、全学校教育活動を通じて発達段階に応じた継続的な指導が必要であり、具体的な教科や単元のみで育むものではありません。キャリア教育は全ての教科・領域・教育活動にキャリア教育の視点を持たせた指導を行うことにより、子どもたちに将来必要な力を育てていきます。また、教科学習では学習に意義付けを行い、何のために学ぶのかということ意識し、実社会に生かせる学びとなるように授業改善を図っています。例えば、単元ごとに自己評価アンケートを用いて振り返りをさせ自己の変容の確認や、教科学習の中でもグループセッションを用いるなどしています。
- また、地域の方をゲストティーチャーにお招きし思いや考えなどをお聞かせいただく取組や、子どもたちが地域に出向いて田植え体験や消防訓練の様子を見学させていただくなどの交流活動を行うことで実践的な力をつけていくという取組を多くの学校で行っています。
- 小学校では平成32年度から学習指導要領が変わります。今回の改訂では、特に地域との連携が強く打ち出されました。「社会に開かれた教育課程の実現」ということで、学校教育を学校内に留めずに目指すところを社会と共有・連携し、学校と地域が協働して子どもたちを育てることが求められています。

文部科学省が定める[学習指導要領](#)（教育課程（カリキュラム）の基準）が変わるよ！



- 京都市では、以前からキャリア教育をはじめとして地域と協働した学校教育を推進してきましたが、キャリア教育を地域との協働で行うということには大きな意義があります。これは、子どもたちが地域から社会で役立つ様々な実践的な力を得られるという一方的なものではありません。地域の方に学校教育に参画いただくということは学校が支援いただくと同時に、地域の方がその地域の子どもたちやその保護者と繋がりを持つこととなり地域コミュニティの活性化につながります。このように学校と地域が共に利益を得られる関係が成り立つことに地域協働の意義があると考えられています。
- しかしながら、推進していくうえで課題もあります。例えば、このような考え方を全教員が理解できているかといえ、必ずしもそうではありません。また、一人の教員だけで取り組めるものではなく学校体制全体で取り組むことが必要です。そういう意味では校長がキャリア教育について理解しながら、子どもたちのキャリア発達を全校で進めていくことが必要なのです。また、多くの教員は大学で学んだ後、実社会で仕事をした経験を持ちません。子どもたちに実社会について指導する教員自身に経験が不足している、といった課題もあります。
- 地域との関わりについても、ゲストティーチャーとしてお招きする地域の方々の価値観や教育観は様々ですので、お招きする際には当該授業をどういった狙いで実施したいのかなど担当教員との事前の打ち合わせも不可欠です。何よりも、地域からの支援がどこの学校でも同じように受けられるというものでもなく、地域によって生じている格差も問題の一つです。
- キャリア教育を推進しつつ、地域との連携をしっかりとし、子どもたちに実社会で生かせる力を育ててまいりたいと考えておりますので、ご理解ご協力をいただければと思います。

## ○ 平尾 和正 委員（市民公募委員）



キャリア教育の定義について、学校教育における社会体験の取組と、一社会人がイメージする「キャリア教育」との間には隔たりがあると思います。社会人の側からするとキャリア教育は、例えば、「今後の社会変化に合わせ、現在は存在しないような仕事を自分のキャリアとしてどうやって作っていくのか」といった一生涯の職業につながる根幹のものであるというイメージが一般的であり、学校教育の中で重視されている地域人材や地域資源を活用した体験活動や職場体験によるキャリア教育というものには少し隔たりがあるように思いました。

なので、地域で子どもを育てる「キャリア教育」を行うとき、地域の方のイメージと学校がしたいことに温度差が生じるのではないかと思うのですが、その差を埋めてイメージを共通認識とするような機会の設定はされているのでしょうか。

## ○ 事務局（稲葉統括）

ご指摘の通り、地域の方にゲストティーチャーとして教育活動にかかわっていただくに当たっては、当該授業を担当する教員と事前の打ち合わせが重要です。担当教員がどのような意図や目的を持ち、ゲストティーチャーをしていただく地域の方にどういった内容のお話していただきたいのか、意思疎通を図っておくことが大切です。地域の方等をゲストティーチャーに招きさえすれば、キャリア教育を行っているとの誤った認識に学校が陥らないよう、校長会で様々な研究を進めております。また、小学校のキャリア教育研究会という研究会もございまして、どのように子どもを育てていくのかということや、キャリア教育の趣旨とは何なのかといったことを研究しています。

## ○ 瀧野 早苗 委員（市民公募委員）



私は「キャリア教育が目指すものとは何なのか？」ということについてイメージがあまり無く、自分で調べてはみました。はっきりとは分からなかったのですが、「自分らしく生きていく」ということなのだろうと思いました。つまり職業を得て、退職後も自分らしく色々な夢や目標を持って生きていくことを目指すための教育なのかなと思っています。職業には様々なものがありますが、なんにせよその職業によって自分らしい表現ができればいいのかなと思います。

話は少しそれますが、私は小平市（東京都）から京都へ引っ越してきた際、公民館を探しました。アスニーという生涯学習センターはあるけれども、私がイメージしていた公民館（他都市において各地域に設置され、地域住民の自治会活動・生涯学習活動の拠点としての公民館や自治会館）は見つかりませんでした。更に調べてみますと、地域の方が学ぶ場が小学校の中にあるということを知りました。地域の大人たちが子どもたちに学んでいく姿勢を見せるとともに、交流する中で自分の人生の中での体験や思いを子どもたちに伝えるということもキャリア教育に含まれるのではないかと思いますので、そういったことも小学校で行ってはどうかと思います。

## ○ 事務局（稲葉統括）

ご指摘の通り京都市には公民館は2つしかございません。しかしながら、小学校や中学校に「ふれあいサロン」という名称等で地域に開放する教室があります。生涯学習部の事業により開設された当該教室は、自治会等に協力いただきその運営を地域の方がされ、様々な自治会活動や学びの拠点となっています。また、京都市の全ての小学校には学校運営協議会があり、地域の方に学校の経営方針等についてご意見をいただいたりしています。この学校運営協議会が学校教育と地域の社会教育をつなぐ役割も果たしており、学校の中に公民館的・社会教育的な要素が含まれていると言えます。

## ○ 瀧野 早苗 委員（市民公募委員）

小平市の公民館では、講座や講演会などで地域住民に学びを提供すると共に、学びの継続のために自主サークルの立ち上げを支援し、更に地域の色々な方とサークルを繋げる役割を担っていました。そうした役割も担っていただき、小学校がより多くの地域住民の学びの場になればと思います。

また、私は放課後子ども教室のコーディネーターを務めていたのですが、放課後子ども教室の取組として、将棋教室ではプロ棋士に教えていただくということもしておりました。子どもたちはとても喜んでいて、市内の将棋大会に出場したりする子どもたちもいました。そういうものに触れるということも将来を考えるうえで大切なことだと思って活動しておりました。

## ○ 稲垣 恭子 委員（京都大学大学院教育学研究科長）



「キャリア」という概念は抽象度が高いため、「生き方探究」と表現することで意味をある程度カバーできており、いい教育プログラムだと思いましたが、それを具体化することは難しいのだなと思いました。いくつか思ったことがあります。一点目は、学校と職業との関係がキャリア教育の一つの柱だと思います。高等教育では職業教育と教養教育を連環させていますが、義務教育においても社会を知るという教育活動を重視するとともに、それを教科学習に返して教科学習と往復させるという連環をプログラムとして確立することが必要だと思います。

また、発達段階に応じ具体的なプログラムを考えておられますが、同時にキャリアを積んでいくうえで共通の課題が他にもあると思います。例えば、ジェンダーの問題があると思います。従来は女性と男性でキャリア観に違いがあることを前提にしてきたと思いますが、それを完全にとっぴらってしまうのか、それともあくまでジェンダーという認識を残して考えるのか。他にも、子どもたち自身の実際の1年間の生活の流れと、現実社会のファイナンスとの中間的なところを学ぶプログラムもあると分かりやすいのかなと思います。それからもう1点、理想とされるロールモデルやキャリアモデルについてですが、存在はしていてもなかなか身近には無く、メディアを通してそうしたモデルを知ることが多いと思います。子どもたちが憧れるような人たちが実際にどのような人生を歩んできたのかを知る、そうしたロールモデルを身近に引き寄せるといった取組もおもしろいのではないかなと思います。

## ○ 事務局（稲葉統括）

全市一律に取り組めるものではありませんが、希望制で有名企業や大学などの専門家や京都サンガ、ハンナリーズの選手に来ていただき指導や体験活動をするプログラムを京都市では紹介しており、スペシャリストに来ていただくという取組も小学校では行っています。中学校・高校ではより専門的に取り組む事例もあり、例えば宇宙飛行士の毛利さんに来ていただいたり、実際に宇宙空間で活動中の宇宙飛行士と通信を行うといった実績もあります。ただ、有名な方に来ていただくのは容易ではなく機会も限られますので、間をどのようにとりもっていくのかについては課題が残っています。

## ○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）



我々は本日この施設を見学させていただき、初めて学習の様子を見ましたが、我々大人でも理解しがたい点もありました。子どもたちにとってもなかなか難しいところがあるかと思えますし、事前学習・事後学習が大切だと思います。子どもたちの事前学習などはどうなっているのでしょうか。

## ○ 事務局（永田事務局長）

スチューデントシティ事業では各校で事前学習を10時間行っていただいています。これは社会と自分との繋がりを知るための学習を中心に各校で行っています。例えば食事を例にとり、食卓に供されたメニューが社会の中で、様々な職種の人が様々な部署と連携しながら、数多くの工程を経た結果、自分の目の前に食事として辿り着いているのか、といったことを学習し、社会にどのような役割や仕事が必要なのかなどを理解するような内容となっています。

ファイナンスパーク事業でも5時間の事前学習を行っていますが、職業体験を通して何かを学ぶということに主眼があるのではなく、例えば、銀行でお金を借りる際のローンの計算と数学の学習内容など、実社会の中で行われていることと学校の教育内容とが繋がっていることが理解できるような学習内容となるようにしています。

なお、京都市では、いわゆるキャリア教育を「生き方探究教育」と呼称しておりますが、これは働く意義や職業観の醸成だけでなく、喜びや苦勞も含めた自らの生き方、子どもたちがどう生きたいかを考える取組を目指し、「生き方探究教育」と名付けたものであります。

## ○ 大八木 淳史 委員（ラグビー元日本代表、丸貴管鋼株式会社顧問）



私も教育現場に身を置いていたことがありますので、西宮市（兵庫県）に民間会社が設立したキッザニア甲子園に行ったことがあります。生き方探究館を比較してみると、やはりキッザニアは当然ビジネスとして運営されていて、職業体験の種類にお笑い芸人もあるという幅の広さもあり、子どもたちが楽しみながら職業体験をできるという施設でした。

探究館での取組は教育委員会の事業として行われているので、キッザニアに比べて少し堅いものだろうと思っていましたし、楽しく学ぶということを教育現場で行うことはなかなか難しい課題だと思っていたのですが、子どもたちがとても楽しそうに学んでいて、できるものなのだと驚きました。また、こうした取組をもっと進めて欲しいと思いました。

教職員のキャリアが最大の課題であると思います。教職員や行政職が企業に出向いて職務体験をするということは難しいと思いますが、例えば京セラなどの社員教育に力を入れている、倫理哲学をもって進められている企業と特別な研修会を企画していただき、教職員に受けていただくというのも一つの方策かなと思います。職場体験ではなくとも企業感覚に基づいた人事研修を受けることは、京都市と企業とお互いに利のあることではないかと思ったり、今後の課題ではないかと思ったりします。

加えて、この施設のように京都市の施設再利用や、年配者のボランティア活動への参画などについては他都市と比べ優れていると思いました。

## ○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）

確かに今のご提案は面白いなと思います。教職員に実際の企業での体験を積んでもらうことは一考する価値があると思います。企業への留学制度なんかもあっていいのではないかと思います。

## ○ 事務局（永田事務局長）

京都市教育委員会では、教職員の研修を総合教育センターが中心に行っております。教員研修の一環で、夏季休業期間中に錦市場であったり京都新聞社やオムロンなどの民間企業に協力いただき、民間企業の組織運営等に関する見識を深める派遣研修があります。しかしながら、その期間は1週間程度となっております。今後も研修制度を充実させていきたいと思っています。

## ○ 大八木 淳史 委員（ラグビー元日本代表、丸貴管鋼株式会社顧問）

文部科学省は、学校の管理職に民間人を採用することを進めてきまして、多くの課題もあらわになっております。私は、管理職だけでなく民間企業に就職した20代後半から30代前半の人たちで、

教員試験の一次試験合格者を優遇できる採用試験制度を導入し、民間企業経験者の教員登用へのチャンスを拡充することが必要ではないかと思っています。そうすることで、より効果が期待できるのではないかと思います。

#### ○ 園部 晋吾 委員 (NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長, 山ばな平八茶屋若主人)



私は京都料理芽生会という若手料理人の会の一員としてファイナンスパークの立ち上時に1ブースをお手伝いさせていただくことで携わらせていただきました。立ち上げ時にはこの事業がどう変化していくのか、どのように続いていくのか分からない中ではありましたが、10年続いており凄いことだと思っています。京都市の教育の一環として根付いているのだなと思いました。ただ、一場面だけではなく前後の学習内容も理解したうえで、ここにあるということが分からなければキャリア教育全体の話は出来ないのではないかと思います。

気づいたことの1つとして、現実社会との距離を近づけるという趣旨の活動だと思うのですが、現実社会とは大きな隔たりがあるなと思いました。何が1番の隔たりかと言いますと、痛みを伴わないことだと思っています。例えば、失敗して借金が膨らんでしまったり、売上が伸びず赤字になっても痛みは伴わず、「黒字になるように何をすべきなのか考えなさい」ということぐらいしか言われません。現実社会での上司からの叱責や、組んだローンが破たんすれば車を売らなければならなくなるなどの現実の痛みが伴っていません。このことは非常に危険な要素ではないかと思っています。机上の学習でやっている限りはゲームと同じ感覚で、ダメになったらリセットボタンを押せばいいという感覚になってしまう。それはとても怖いことで、どこかの段階・過程でリセットボタンはありませんよという要素をプログラムに入れ込む必要があるのではないかと思います。このことは最初から全面的に押し出してしまうと、子どもたちに社会は怖いものだと思わせてしまいますが、しかし、楽しい面もあり一方で苦しい面もあるのだということはどこかに入れるべきではないかと思いました。

#### ○ 事務局 (永田事務局長)

ご指摘の通りですが、今の子どもたちは失敗を恐れます。実社会では「失敗をしてもそれを次に活かすためにどのように改善していくことができるのかが大切だ」ということを教えてもらえます。ここでの活動はそのことに気づいてもらうことが大事なのかなと思います。

昔の学齢期の子どもたちは地域の商店や工場の方と直接触れることができ、自分に対する態度からお客さんに対する真剣な態度へと移る変化を直接目の当たりにすることができ、そうしたことから社会に出た時の心構えなどを身に着けることができていたと思います。しかし、最近は子どもたちと社会がかけ離れてしまい、こうした学びの機会を得ることは難しくなっています。京都は地域コミュニティがまだ残っており、比較的こうした機会も残っているように思いますが、他都市では分断された社会となり様々な問題が生じています。そうしたことから、まずはこうした仮設の街を作り経験や実社会での必要なことを気づかせることを重視しています。

スチューデントシティ事業では様々な小学校の児童が160人ほど集まり学習活動を行います。当然、他校の面識のない児童と活動を共にするのですが、児童はいつも以上に緊張します。そういった経験も踏まえ、中学校でのファイナンスパーク事業や実際の企業や商店などで職業体験をするといった取組を行っています。その上で、大学生くらいまでには自らの行動・判断にはリスクが伴っているという経験をするのが必ず必要だと思いますし、大学も自分の将来を考えて選べるようにしていかなければならなりません。そういったことにつながる教育を行う必要があると考え、このプログラムを行ってきました。学校内での教育活動にも、もっとキャリア教育の視点を取り入れていかなければならないと考えていますし、さらに広げていくために、地域も保護者も含めて社会全体で取り組んでいく意識が必要だと思います。

委員にご指摘いただきました点はその通りだと思いますので、子どもたちの発達に応じたふさわしいプログラムの充実に努めてまいります。

#### ○ 榎木 良子 委員 (NPO 法人京の美代表)



本日こちらの施設を見学させていただき、小学生の皆さんが生き活きと活動していたのを見て感心しました。

先ほど見学させていただいたように京都の大手企業から協力いただくことも大切ですが、地元の八百屋さんや本屋さん、薬屋さんなどからも、子どもたちが学べることはあると思います。地元のお店に協力いただき、グループやクラス単位で1年間くらいをかけながら、どうしたらお客さんに喜んでもらえるのか、もっと多くのお客さんに来てもらえるのかといったことを、子どもたちがグループセッションなどを通じて、子どもなりの意見や考えて議論することもできるのではないのでしょうか。そういった身近な環境で学んでも達成感などは得ることができるのではないかなと思います。お金のやりくりについてなどを学ぶことは難しいでしょうけれども、こうしたらお客さんは喜んでくれるんだとか、十分にやりがいは感じられるのではないかなと思いました。

もちろん大手企業のきっちり基礎の出来たところの方の専門的な知識や、会社を築いてきた社長の言葉も大切ですが、小学生・中学生くらいのお子さんにはもっと身近な所で社会に貢献する、自分の力を試してみる、といった取組を通じて、自らの夢を実現させていくという方法もあるのではないかなと思います。

#### ○ 齊藤 修 議長 (株式会社京都新聞ホールディングス顧問)

榎木委員のご指摘のとおりだと思います。ただ、現在は昔と違い商店街の中の様々なお店で自然と学ぶということが出来なくなってきています。なので、こうしたバーチャルの施設を作る必要性があるのだと私も思います。

#### ○ 事務局 (永田事務局長)

当館を開設にするにあたり、「21世紀型教育コンテンツ開発委員会」というものを立ち上げ、様々な議論をしました。その中でも「大企業ではなく地域の商店でもいいのではないかな」といった意見がございました。しかしながら、議長が今言われたように地域社会が変容し、地域では賄いきれない役割をこの施設が担うということでこのような形で開設しております。地域社会で生き方探究館が担っていることが出来るのであれば、それに越したことはなく当館も必要ないと私も思っています。それができない社会状況にある中で、当館に来てもらい子どもたちや先生に何か一つでも気づいてもらい、学校に戻ってどうしていいかということにつながればと思っています。10年続けてまいり、一定の理解を得られたと思いますので、次のステップとして各地域社会の中で当館が担っている役割を果たしていただき、足りない部分を当館が担っていくという関係性が築ければ良いと考えています。

#### ○ 佐伯 久子 副議長 (京都市地域女性連合会会長)



中学生で実施する「生き方探究チャレンジ体験事業」で、身近な保育園やスーパー、コンビニなどで1週間職業体験をした子どもたちから話を聞くと、「思っていたよりも大変で一週間がしんどかった」とか「お金をもらうということは大変」といったことを話します。この施設やプログラムを見せていただき、変な言い方もしれませんが、実際の社会と比べると整いすぎているという印象を受けました。

また、私の年代になると「キャリア」と言えば「キャリアウーマン」などが連想されます。私たちの世代の価値感からするとあまり好意的な印象をお持ちでない方もいるように思いますので、地域の高齢者に「キャリア教育」と言う名称だけで取組を広げようとする



ることは、教育委員会や学校の意図を正しく理解されないこともあるかと思います。事務局からの説明を聞きますとなるほどなと思うのですが、キャリア教育の理念を地域に広め、共通理解を持って地域での体験活動を行うには少しハードルが高く、難しい部分があるのではないかと思います。ですので、地域での体験活動だけでなく地域で体験活動してきた子どもたちもまた、ここに来て学ぶことで地域だけではできないことも学べていいのではないかと思います。この施設での体験学習は希望制ではなく、京都市の全ての小中学生が来られるのですか？

○ 事務局（永田事務局長）

小学生が対象のスチューデントシティ事業や中学2年生で実施する職業体験は全ての対象である児童・生徒が参加しています。ボランティアの確保の課題等によりモノづくりの殿堂学習やファイナンスパーク事業は希望制ですが、モノづくりは約97%、ファイナンスパーク事業は約78%の学校が参加しており、希望制ではあっても多くの児童・生徒が来ています。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）

子どもたちが生き方探究館に来て、皆が一律に同じことをするのがいいのか、地域で出来る学校は地域でやってしまうといった多様性を持たせてもいい気はしますね。

○ 森 清頭 委員（清水寺執事補、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）



今日初めてこの施設を見させていただいて、私が小さい頃にもこんな施設があれば面白くてよかったのになぁと思いました。既に多くの委員がご意見ご質問されていますので、私は1点だけお伺いしたいのですが、ここを实际利用した子どもたちの感想などはどうでしょうか。

○ 事務局（永田事務局長）

子どもたちは当館での6時間の学習で見事に変わります。例えば、挨拶一つをとってもその仕方が変わるだけでなく、「なぜ挨拶をするのか」を理解するようになります。探究館での体験学習を通じて、社会で大事にされていることを目の当たりにしますので、そうしたことを理解しやすいのです。

ここでは先生は引率と子どもたちの活動の評価のみをしていただいているのですが、ここでの様子と学校とでは違うことを目の当たりにされています。学校で活発に話す生徒がここでは戸惑う姿が見られます。そのことを教員には的確に捉えていただき、それぞれの子どもの資質など含めて学校での学びに活かしていただくきっかけを掴んでいただく場所が探究館です。そのことを学校がさらに地域に広げ、同じような役割を地域にも担っていただけるようにするよう取り組んでいきます。

10年取組を続けてきて、一定のレベルに来たと考えていますので、今後は量的ではなく質的にレベルを上げていく時期なのかなと思っています。

○ 吉川 左紀子 委員（京都大学こころの未来研究センター教授・センター長）



私も今日初めて京都市にこういう施設があることを知りましたので、とても興味深く見学させていただきました。子どもたちの視点で見たときに、この施設で何が1番の学びになるのかと考えてみると、様々な職場での役割を実際にやってみることで、普段の自分とは違うものの見方や感じかたを体験できることではないかなと思いました。お店に行って買い物をするのは日常生活でもやっていると思いますが、売る側の立場になったときの経験というのはまったく違いますから、学ぶこと

が多いと思います。結婚式やお葬式なども、子どもたちの普段の生活では滅多に経験しないことですが、ここで体験すると、実生活でも振り返りができる。社会の仕組みについて知識が増すだけでなく、模擬体験としていろいろ考えるきっかけを提供するという点で、こうした施設には他にはない価値があると思います。それと、10年間の取組を通して、子どもたちだけでなく、企業の方たちもここで出会っていろいろ調整をする中で、新しい協力体制が生まれていく可能性もあるのではないかと思います。

#### ○ 本郷 真紹 委員（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）



大学関係者の見解としまして、高等教育と初等中等教育では「キャリア教育」の意味合いが異なると考えています。高等教育での「キャリア教育」はキャリア（仕事）と連動するものでなければ意味が無いものです。一方、初等中等教育では逆にあまり仕事と連動してはいけないのではないかと考えています。

一番重要なことは子どもたちに動機づけることであり、その動機づけというのは、こういう経験をしたから将来自分はこういう職業に就くという単純・短絡的なものだと少し危険だと思うからです。先ほど、園部委員が仰ったように現実はそのように甘いものではありません。例えば、野球が好きな子どもが全員プロ野球選手を目指し、そのための道だけを歩むとえらいことになります。ですので、動機づけというのはあくまでも「だから今何をしておかなければならないのか」という、成果を得るために学ぶことの必要性を認識させることが一番大事なのではないかと思います。

色々な体験をする中で、小学校でもっと算数を、中学校でもっと数学をやっておけばよかったという反省は必ずあります。しかしそういう反省は実務を体験していないと意味が分からないんですね。もうやらされている感しかない。けれども「そういったスキルを持っていると便利だし役に立つでしょ、それを持っていないと自分の選択の幅を狭めることになっていきますよ」ということを身をもって知ることができれば、普段やっていることの意味が理解できるようになります。

大八木委員はよくご存じだと思いますが、スポーツにおける基礎トレーニングは、試合のためにどのような目的で行うのかを理解していなければやっても意味がないんですね。それがどのような効果につながるのかということを知ることが一番重要だと思います。

本日拝見した、一流企業をつくりあげた方の偉人伝みたいなものに子どもたちを触れさせることも大事なんですけれども、一方で、世の中でキャリアを積んだ人たちから失敗談を聞くことから、自分たちが小中学校でやっていることの意味を知ることができ、「やらされているのではなく自分の将来にとって意味のあることなのだ」という認識に変えることができる重要な機会になるのではないかと思います。そういう意味合いで義務教育での「キャリア教育」は重要なのだと思います。

#### ○ 千賀 修 委員（平成28年度京都市PTA連絡協議会会長）



社会教育委員である前に、子どもを持つ一人の親としての個人的な意見ですけれども、先ほど森委員が「ここに来て子どもたちはどうですか？」というご質問をされ、事務局からは「1日で変わりますよ」というご回答でした。実際、私の中学1年生の娘が先日、このファイナンスパークに来まして、帰ってきてから話を聞きますと、いつも私たち夫婦が「ローンや家計について話しているのをなんとなく聞いていたから、そういった話は分かると思って行ってみたら全然違った」とのことでした。やはり大事なことは、こんなことがあるのだと気づくことだと思います。

親として子どもには色々なことを学んで欲しいと思います。何かに特化して学ばせるのは子どもが「これをやりたい」と希望したときだと思いますが、それ以外は色々なものを見せてやりたいというのが親としての私の思いです。そういう機会を京都市の学校に通っていたら持てるのはありがたいで

すし、実際にファイナンスパークで学んだことが将来生きないかもしれないけれども、こんなことがあったなということが頭の引出しの隅に入っていれば、子どもにとっていい経験として残るのではないかと思います。

他都市にこうした教育プログラムがあるのかといえば無いんですよね。本当に京都市は他都市と違ってこういった取組を早くから進めていたのだと、PTAの役員になって初めて気づきました。単に一人の保護者であれば、こうした場でこのような話がされていることや、学校給食の話などを知る機会がありません。私はたまたま知ることができましたが、冒頭の挨拶で周りの保護者にそういうことを少しでも伝えたいと言ったのはそういうことなんです。色々な家庭がありますが、家庭教育がまずあって、子どもと親がしっかりと接し、学校教育があってその中でファイナンスパーク事業や生き方探究・キャリア教育がすべて相まって将来素晴らしいものになるのではないかと思います。

また、先ほど大八木委員が言われた学校の先生についてなのですけれども、今の小中学校は本当に若い先生ばかりなんです。それは団塊世代の教員が大量に退職したことや、当時の社会状況等から私のような40～45歳くらいの中堅の先生は人数がとても少ないんですよね。そうした状況から団塊世代の大量退職に伴い、若手教員の採用を増やさなければならない。若い先生方は当たり前ですが完璧なわけがなく未熟ですし、しかも、今は残業ができず激務の中で業務の削減にも取り組まなければならないということで、教員の研修機会も少ないと思うのですが、大八木委員の言われるとおり、子どもたちを安心して任せられる先生の教育にも、同時に力を入れていただければと思います。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）

教職員の教育・研修についてはどのように取り組んでいますか？

○ 事務局（稲葉統括）

総合教育センターでは初任者をはじめ節目ごとに悉皆研修を行っています。また、学校ごとに様々なテーマによりますが、子どもたちをどのように育てていくか校内研究・研修も行っています。当然のことながら、教育委員会としては色々な研修を行っています。新規採用者にはベテランの指導員がついて指導もしていますが、若い先生方につきましては子どもたちへの指導経験も積んでいかなければなりませんので、一定、見守っていただきたいところもあります。

○ 山崎 弥生 委員（伏見南浜小学校長）【欠席委員からの意見紹介】

キャリア教育につきましては、その重要性が言われ始めた頃から、私自身本当に大切な教育であると考えて参りました。単なる職業訓練や職場体験をさせるということではなく、子どもたちにどのような資質や能力を育むことが生涯にわたり、自己の良さを発揮しながら社会貢献することができる社会人を育てることにつながるのかということ、私たち教職員が明確に理解して教育にあたる必要があると思っております。

そのために、「[京都市キャリア教育（生き方探究教育）スタンダード](#)」の中で、子どもたちに身に付けさせたい力が、例示されていることがとても大切だと思っています。学校教育の中でどのようにその力を育成していくのか、すなわちキャリア発達をどのように促すのかということが、私たち教職員の課題です。また、そのような教育を行っていく必要があることを教職員に浸透させることが、私たち校長としての課題です。多くの小学校では、校内研究として教科や領域の指導法について研究していますが、その際、キャリア教育とのかかわりを明確にして進めることが必要であると思います。この教科や領域の研究に取り組む際に、付けたい力のどのあたりと関わるのかを明確にし、教職員が意識して取り組むことが必要です。

また、社会に開かれた教育課程という視点から、最近では、生活科や総合学習などをはじめとして、地域の方々をゲストティーチャーとして学習することがどの学校でも見られます。

その道を極めた方やそれぞれ技術をお持ちの方に来ていただくことは、本物に出会うという機会であるとともに、人に出会う機会でもあります。人との出会いは、単に知識や技術を学ぶということではなく、物の見方や考え方、その方の生き方に触れる大切な機会です。そのことを児童・教職員は実感することができる機会であるのですが、このことは保護者や地域の方々にもまで伝わりにくいのではないかと思います。

保護者や地域に向けてこのような学習の価値を発信することが大切であると思います。また、あらゆる地域に特色あるキャリア教育を実施していただく地域資源・人材が発掘されているとは言えないと思いますので、京都市全体で、人材やキャリア教育に活用できる地域資源・協力企業などを紹介していただけるような仕組みがあればと思います。

## ■ 報告一 第59回全国社会教育研究大会（北海道大会）について

### ○ 瀧野 早苗 委員

9月12・13日に札幌市で開催された全国社会教育研究大会に参加させていただきました。シンポジウムや分科会等にも参加させていただきましたが、『『思うは招く』～夢があればなんでもできる～』と題された植松努さんの講演が特に印象に残りました。講師の植松さんは本業の傍ら、子どもの頃からの夢であったロケットの開発と打ち上げをされ、子どもたちに体験教室などを開催されているそうです。

講演の内容は植松さん自身が幼い頃に、学校の先生にロケットを打ち上げる夢を話したところ無理だと否定されたが、それは先生がやり方を知らなかったからであり、未来のことは誰にも分からないのだから夢は諦めないで欲しいなどの、ご自身の体験に基づいたお話でした。これは私たち大人に対して、自分が理解できないからと言って子どもたちの夢を否定したり潰したりしないで欲しい、また、大人自身も成長し続けて欲しいというメッセージでもありました。静かで落ち着いた口調でしたが強い意志を感じましたし、子どもたちにも直接聞かせてあげたいなと思いました。

大人も成長し続ける必要があり、学び続けて知識・経験をつけて子どもたちにより良いアドバイスのできる、自分より若い人たちにとってお手本になるような大人でありたいと思いました。公民館での学びには一方的に話を聞いたりするだけでなく、連続講座などによりそれらをもっと深く自分のものにする学びがあります。そういう大人も学び続けられる環境を作って欲しいと思いました。

帰宅後に植松氏のブログを見たところ、「成長しない人は他人の成長をつぶす」「大人の経験値が子どもの可能性を増やす」「今努力をしない人は過去を語り、今努力をしている人は未来を語る」といった言葉が書いてありとても感じ入った次第です。

## ■ 報告二 平成29年度近畿地区社会教育研究大会（京都大会）について

### ○ 平尾 和正 委員

9月11日に開催された平成29年度近畿地区教育研究大会に、午後の「学校・家庭・地域の連携協力を進める事業の実施」をテーマとした分科会から参加させていただきました。

兵庫県上郡町の「放課後子ども教室事業」が事例として取り上げられ、同町の出席者から事業内容について説明いただき、他の参加者と協議させていただき分科会でした。上郡町の取組では社会教育委員が積極的に地域の方々をとりまとめ、放課後の子どもの居場所づくりの一環として「放課後子ども教室事業」を進めているとのことでした。この「社会教育委員が地域を巻き込んで事業を作っていく」ということに多くの社会教育関係者が興味を持ったようでした。

私も「放課後子ども事業における課題とは何なのか」と質問をさせていただきましたところ、地域ボランティアの年齢分布に偏りがみられ、私のような30代男性が少ないとの回答をいただきました。私自身、京都市の放課後まなび教室でボランティアとして活動していますが、同年代のボランティア

は少なく、男性ボランティアが居るだけで男子小学生がとても喜んでくれることを考えると、ボランティアとして確保できない年齢層などがあるという問題については、近隣大学の大学生をボランティアとして活用する仕組みであるとか、非営利組織などを活用してボランティアを確保していく仕組みが必要なのではと思いました。また、幅広い年齢層のボランティアを継続的に確保することは、今後の学校・家庭・地域の協働において非常に重要なテーマではないかと思いました。

### ■ 報告-3 平成29年度京都市生涯学習市民フォーラムについて

#### (事務局から)

- 去る11月6日(月)に同志社大学寒梅館ハーディーホールにて開催し、募集定員を大きく上回る約600名の市民の皆様に参加いただきました。
- 第1部の総会では、松本紘フォーラム会長と門川市長から、101名の方々に生涯学習推進者表彰を授与し、新規加盟9団体の紹介をさせていただきました。
- 第2部のシンポジウムでは、『『ほんまもん』に会うまち京都～文化に彩られた珠玉の博物館～』をテーマに、細見美術館館長の細見良行氏や2017ミス日本グランプリの高田紫帆氏をゲストにお招きし、松本会長・門川市長とともに、2019年に日本初開催の国際博物館会議(ICO)京都大会の開催に向け、博物館・美術館・京都のまちのことについてディスカッションを行っていただきました。

フォーラムの様子は[こちら](#)からご覧になれます！



### ■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

#### ■ 閉会 [齊藤議長]

#### ■ 閉会挨拶

閉会にあたり、在田教育長より挨拶をいただきました。